

第四資料室報告書

第2号

四皇子塚の

御神渡



第四資料室報告書 第2号

「四皇子塚の御神渡」

明治期から続く断片資料の余白に、小さく「御神渡？」と記されていた。

当地に湖はなく、氷結の記録もなく、その単語は明らかに場違いである。

廃棄理由は付されていなかったが、廃棄するにも判断材料が不足している。引継書には、本資料についての記載がなかった。そのため本資料を調査対象として扱うことにした。

資料には、「四皇子塚周辺では、一定期間ごとに掘削痕が確認される」とある。

ただし土壌の攪拌層は新旧が混在し、同一人物による作業とは考え難い。前任者のメモには、掘削地点を結ぶと一本の線が現れることも記されている。

なお、この現象は前任担当者の死亡以降、確認されていないようだ。

掘削現象について、前任担当者はメモの中でこれを「御神渡」と呼称していたようだ。

当該名称は正式な調査用語ではない。

なお、同名称は引継書には記載されていない。

余白の「御神渡？」の文字には、薄く擦過の跡があるが、完全には消されていない。

鉛筆で擦過した痕が、文字の上部に残っている。

だが、その行為は途中で止められている。

当該資料が廃棄候補棚に移されたのは、管理印から推測して平成中期だろう。

同時に担当者名が一つだけ残っている。

その人物の在籍期間を調べると、彼は三年で他部署に異動しているが、

異動記録には特記事項はない。

当該資料に押された管理印は平成十八年のものだった。

この人物は既に退職しており、人事記録を辿ると退職当時同じ課に在籍していた職員が一名、現在も再雇用で在籍していることが分かった。

再雇用の彼が直接関与していたかは不明であるが、当時の状況を知っている可能性は捨てきれない。

確認のため、面談を申し入れた。

彼は老眼鏡をかけ直し、紙面を近づけた。

数秒沈黙し、やがて首を傾げた。

「……ああ、これか」

語の意味ではなく、「消し跡」を指でなぞった。

「彼は、消すなら消す人だった」

それだけぽつりと言う。

「この人、最後のほうはな、妙に“線”を気にしてた」

線？御神渡の渡る線のことか。

気にはなったが、面談記録には、この発言のみを残す。

管理印に記された氏名を再度人事記録で照合した。

在籍期間は昭和六十年から平成十九年で退職理由は「依願退職」とのみある。

その後の消息は記録に残っていないが、再雇用職員に確認したところ、数年前に逝去したと聞いた。

死因の記録は残されていない。

ぼくは担当者の逝去年を確認したのち、埋葬先を調べた。

高千穂町内のどこにでもある寺院墓地である。

念のため位置を地図に落としたところ、四皇子塚の一つと直線距離で数百メートルの位置にあることが分かった。

第四資料室報告書 第2号 「四皇子塚の御神渡」
著者・制作：第四資料室
発行：2026年2月
